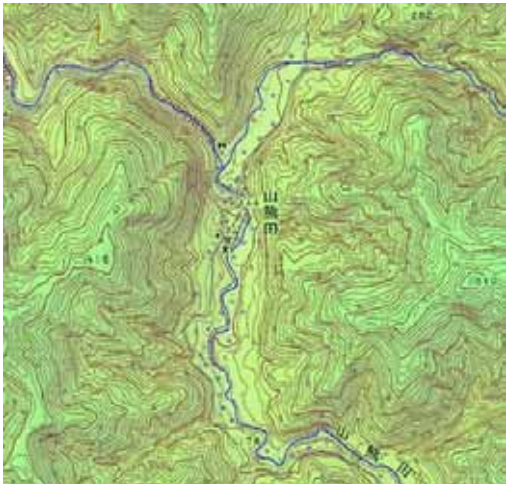


事例 No.52 新潟県村上市山熊田

1. 地域の概況（基礎データ）

範囲・位置	範囲 位置	- 新潟県村上市山熊田 都市部から離れた山村集落である - 新潟県最北部に位置する。 - 新潟市中心部から直線距離で約 80km、村上市中心部から直線距離で約 30km 離れた山間部に位置する。   図 山熊田の地形 (出典：国土地理院)
	地形・水系	非常に急峻な地形条件である - 海岸から直線距離で約 15km に位置しているが、朝日連峰から連なる山間部に位置する。 - 山熊田集落の標高は約 150m とそれほど高くはないが、谷のすぐ両側には標高 400～500m の山々が連なっており、急傾斜地に取り囲まれている。 - 冬季は積雪が 2～3m に達する豪雪地である。  図 山熊田の地形 (出典：国土地理院 HP)
自然条件	植生	集落近くの低地や谷筋にスギ植林、それ以外の場所にはブナ・ミズナラ群落広がる - 山熊田集落の周辺の植生は大半が森林であり、集落近くの低地や谷筋にスギ植林、それ以外の山腹等にブナ・ミズナラ群落が広がる。 - 谷底が狭いため、水田・畑地は集落の近く等に限られる。  凡 例 IV. ブナクラス域自然植生 15 自然低木群落 V. ブナクラス域代償植生 18 ブナ・ミズナラ群落 IX. 植林地、耕作地植生(各クラス域共通) 40 スギ・ヒノキ・サワラ植林 45 畑地雑草群落 48 水田雑草群落 図 山熊田周辺の植生 (出典：第3回自然環境保全基礎調査)

社会条件	土地利用	多様な種類・林齢が組み合わさったモザイク状の土地利用が形成・維持されている ・前記のように、本地域の植生は、谷底の農地、集落周辺のスギ林、さらにその周囲に広範に分布する二次林の組み合わせで構成されている。 ・また、人工林については、後述する山焼き（焼畑）と植林のサイクルにより、様々な林齢の樹木で構成されており、モザイク状の土地利用が形成・維持されている。
	人口	林業の不振により人口が地域外に流出し、過疎化・高齢化が進んでいる ・古くから林業を生業として生活してきたが、近年の低迷する林業情勢の中、地域の人々は働く場を求め地域外に流出し、人口の減少が進んでいる。 ・現在の山熊田集落の世帯数は約 20、人口は約 70 人である。
	産業（主に農林業）	古くから東北の日本海側で見られた山村の生活・生業が継承されている ・山熊田に限らず、東北地方の山間部では、焼畑によって雑穀やカブなどを栽培し、その跡地にスギを植え、50 年～100 年かけて育てて売するという生活・生業が行われていた。また、夏季に農業・冬季に集団狩猟を行う「マタギ」が広く見られた。 ・このような生活・生業は、現在ではほとんどの地域で姿を消しているが、山深い地域に位置する山熊田では、これらの営みが今日まで継承されている。 （詳しくは後述）

2. 地域における里地里山の保全・活用の取組

～ 山からの恵みを活かした生活・生業の再認識と継承の取組 ～

1) 伝統的な里地里山の利活用

【山焼きと林業】

- ・山熊田に限らず、東北地方の山間部では、山焼き（焼畑）によって雑穀やカブなどを栽培し、その跡地にスギを植え、50年～100年かけて育てて売るといった生活・生業が行われていた。
- ・特に、山熊田を含む旧山北町地域は、古くから優良なスギの産地であり、スギの植林の前段的耕作として広く行われていた。

【灰の文化】

- ・電気もガスもなかった時代、人は山から木を切り出し、それを燃やし、暖を取り、煮炊きし暮らしてきた。そして、木を燃やすことで生じる灰を捨てることなく、酒、味噌、醤油、和紙、染物、焼き物を作る時や食物のあく抜き等、衣食住の様々な分野で巧く利用し、暮らしを豊かにしてきた。
- ・化学薬品がなかった時代、灰は捨てるものではなく大切な資源であった。

【しな織り】

- ・地域の二次林に多く生えるシナノキの皮を年に一度だけ剥ぎ、その表皮をほぐして糸にし、さらに帯や帽子に織り上げた「しな布」は、かつての山里の生活に欠かすことのできない生活必需品であり、しな織りは冬季間や農閑期の主婦の仕事一つとして、昔から引き継がれてきた。

表 山熊田における山焼き（焼畑）の暦

時期	作業	
7月	整地	・樹木伐採、下草刈り、地寄せを行う。 ・上部、周辺部をホウキ等ではき、地面を出す。 ・溝を掘り、防火帯を作る。
8月	火入れ 種まき	・山間部で風がやむ午前零時頃から火を入れる。 ・火は必ず上部から点火し、燃えやすい杉の枝を使って下に降ろしていく。 ・翌日のまだ地面が熱いうちに農作物の種を蒔く（灰の熱が種の発芽を促す）。
9月	・ ・ ・	焼畑は雑草が生えず、虫がつきにくいいため農薬が必要ない。また、灰には栄養が豊富で肥料の必要が無い。
10月	収穫	・農作物を収穫する。
翌春以降	スギの植樹	・焼畑跡地にスギを植樹する。 ・30～50年後に伐採する（再び焼畑を行う）。



図 焼き畑の様子（左：火入れ 右：赤カブの収穫）（出典：山北商工会 HP）

2) 現在の里地里山の保全・活用の取組

取組の実施主体・体制

- ・山熊田集落では、昭和 60 年に伝統工芸品である「しな布」の継承に取り組みはじめた。
- ・その取組を続ける中で、平成 12 年に山熊田の主婦たちから「自分たちも地域にかかわりのある仕事を仲間と一緒にやりたい」との声が出され、集落内外からの出資者を集めて「さんぼく生業の里企業組合」を設立し、地域の生業を継承し活性化につなげるための取組が始まった。

表 村上市山熊田における里地里山の保全・活用の主な実施主体
(: 主な主体 ○ : 関与している主体 ・ : 過去に関与していた主体)

1. 地域コミュニティ (土地所有者、集落、組合等)		・集落住民が中心となって「さんぼく生業の里」を設立し、地域活性化の取組を実施
2. 外部人材 (NPO, NGO、企業、学校等)	-	-
3. 行政機関 (地方自治体、都道府県、国等)	○	・施設整備やイベント等への支援
4. 多様な主体が参加・連携する組織体	-	-
5. その他	-	-

取組の目的・理念

- ・生業の里企業組合は、決して「生業」にこだわり続けたのではなく、「ここの暮らしが好きだから。」だから、当たり前、自然に「生業」を受け継いできた人々の暮らしを、多くの方に、「来て、見て、体験」し、「思い出して欲しい」、「感じて欲しい」、という思いから設立された。
- ・その目的は、山熊田の住民たち自身が地域文化の価値あらためて見直し、活力を向上させることであり、「集落による集落のための活動」である。
- ・上記の取組を持続的に進めているための「人づくり」(後継者確保)として、都市住民との「交流」に力を入れているが、都市側のニーズに合わせるのではなく、山熊田の文化に共感する人を受入れるという姿勢で取り組んでいる。

取組の経緯

- | | |
|---------|---|
| 昭和 60 年 | ・山熊田集落が旧山北村の「村おこし事業」に名乗りをあげ、古代織として伝わってきた「しな布」の継承の取組を開始。 |
| 平成 10 年 | ・山熊田の住民が、フランスで開かれた日仏交流展で「しな織り」を披露し、その中で改めて地元の文化の深さに気づき、「何かやりたい」という声があがる。 |
| 平成 12 年 | ・山熊田集落の 5 戸 10 人の住民と集落外の 9 人の支援者の出資により「さんぼく生業の里企業組合」を設立。
・集落の入り口にあった空き家を譲り受け、活動拠点「体験工房」として整備し、特産品の販売や体験プログラムを開始。 |
| 平成 14 年 | ・体験工房の隣地を買い取り、県・町から補助金を受けて工房施設を新たに整備。 |
| 平成 15 年 | ・「しな布」が伝統的工芸品の指定を受ける。 |
| 平成 17 年 | ・焼畑の体験ツアーを開始。 |

取組の主な内容

【しな織りの継承】

- ・伝統工芸品である「しな布」を継承するため、特産品として生産・販売を行っている。また、グリーンツーリズムのプログラムの一つとして、「生業の里」におけるしな織り作りの見学、はた織り体験に取り組んでいる。
- ・しな布を作るためには下記のように非常に手間と時間を要するため、生業の里のスタッフに限らず、集落が総出で作業を行っている。
- ・山熊田では、シナノキを持続的に利用するため、焼畑にシナノキの植林を行っている。

しな織りの工程

山に入って樹齢 8～10 年のシナノキの皮をはぎ取る。
皮を乾燥させ、いったん保存する。

水に浸し、軟らかくするため木の灰と共に煮込む。
清流で不純物を取り除き、帯状の繊維を取りだす。
自然の色つやを出すため 2～3 日米糠に漬け、ぬかを
洗い落とし日陰で干しする。

しな皮を細かく糸状にする。

(以降、生業の里で作業)

糸車でよりをかけ糸を紡ぐ

布を織る(熟練者でも 1 日で約 1.5m 程度)



図 しな織りの様子(生業の里)

【「灰の力」を利用した特産食品の販売等】

- ・灰の力を利用した特産食品の販売を行っている。また、旬の食材を使用した郷土料理の弁当を提供している。
- ・これらの特産食品は、集落の農林家が生産したもののうち、自家消費以外の分を組合が買い取っている。各家庭にとっては良い現金収入源となっている。

- 赤カブ漬け：山焼きの畑で栽培された赤カブを使用
- トチ餅：灰の力を利用してアク抜きする
- あく笹巻：木灰汁に浸したもち米で作られる笹巻き

図 左：赤カブ漬け(出典：さんばく生業の里 HP)
右：あく笹巻(出典：村上市 HP)



【伝統文化の体験プログラム(山焼き体験など)】

- ・「灰の文化」を体験してもらうため、様々な体験コースが用意されている。

- 赤カブ漬け体験
- 餅つき体験
- あく笹巻づくり
- しな織り体験
- ブローチづくり

- ・また、赤カブの収穫体験をさらに発展させ、平成 17 年には山焼きと土ごしらえ、そして翌日の種まきまで、焼畑の一連の作業を体験できるツアーを実施した。このツアーには 15 人が参加し、集落内の農家への民泊も実現した(さんばく体験交流企業組合と共同で実施)。

3 . 取組による成果

1) 里地里山の土地利用・管理の効用

自然の恵みとそれに根ざす生業・生活の文化が今日まで継承されている

- ・山熊田の住民は、集落を取り囲む山の恵みを持続的に利用することで、山焼き（焼畑）による農林産物、スギ材、しな織りの原料など、多種多様な植物資源を獲得してきた。
- ・このような伝統的な生活・生業を通じて、人工林・二次林・水田が組み合わさったモザイク状の土地利用が形成・維持されるとともに、これらを支える仕組みや技術（焼き畑と植林のサイクル、灰の利用など）が今日まで継承されている。

近年の里地里山管理の取組を通じて、再生又は新たに獲得された効用がある

- ・近年の新たな取組により、伝統的な生活・生業で得られる自然の恵みを特産物として販売し、その売上が年間約 2,000 万円にも達している・
- ・特産物や焼畑、しな織りなどの地域文化をテーマとした都市・農山村交流の取組により、年間 6,000 万人が地域を訪れている。
- ・これらの取組及び成果を通じて、地域住民自身が伝統的な生業・生活の価値を改めて見直し、その継承に向けた意識が高まっている。

表 村上市山熊田地域における里地里山の土地利用・管理の主な効用

項目	過去からの土地利用・管理で培われてきた効用	近年の取組を通じて再生・獲得された効用
1. 生物多様性保全（生物種・生息環境・土地利用）	・人工林・二次林・水田が組み合わさった環境、場所を変えて繰り返される山焼き等により、モザイク状の土地利用が形成・維持されている。	
2. 資源の持続的利用・生態系サービス（水・食料・生産物・気象・土壌・エネルギー・廃棄物・CO ₂ ）	・山焼き（焼畑）による農林産物、しな織りの原料など、山とのつながりの中で多種多様な植物資源を獲得してきた。	・近年の新たな取組により、伝統的な生活・生業で得られる自然の恵みを特産物として販売し、その売上が年間約 2,000 万円にも達している。
3. 人間の福利への貢献（人口増減・平均寿命・健康度・幸福度・郷土意識・相互扶助・快適性・自然認識）	-	・特産物や焼畑、しな織りなどの地域文化をテーマとした都市・農山村交流の取組により、年間 6,000 人が地域を訪れている。
4. 歴史・文化の継承	・山とのつながりの中で培われてきた伝統的な生活・生業が、今日まで継承されている。	・地域住民が伝統的な生業・生活の価値を改めて見直し、その継承に向けた意識が高まっている。

2) 外部評価

地域の取組が評価されている

- ・平成 15 年度に「しな布」が伝統工芸品に認定（経済産業省）
- ・平成 18 年度に「立ち上がる農山村」に選定（農林水産省）

4 . 今後の課題

交流人口の拡大を定住に結びつけるための取組

- ・ 山熊田地区では、地元で培われてきた焼畑や食文化などの生業を活かし、特産物の製造・販売や体験型観光プログラムに取り組み、山間部の交通アクセスが不便な地域にありながら着実に交流人口を拡大させている。
- ・ 一方で、過疎化・高齢化は依然として進行しており、このままでは生業を支える後継者が不足し、長年にわたり培われてきた文化や知恵・技術が継承されなくなる恐れもある。
- ・ 今後は、グリーンツーリズムから、I ターン・U ターンにつながるような流れを生みだし、生業の後継者を育てるための取組が必要とされる。

地域に伝わる持続的な農林業文化・技術の発信

- ・ 山熊田地区で古くから行われている「山焼き」(焼畑)と林業のサイクルは、地域の気候風土に基づく持続的な農林業であるが、生産性が高いとは言えないため、現在の我が国ではごくわずかな地域でしか継承されていない。
- ・ このような伝統的な営みは、「環境との共生」や「持続可能な成長」というこれからの社会で必要とされる考え方と共通する優れた価値を持つものと言える。
- ・ 今後は、「伝統」や「地域らしさ」という「オンリーワン」の価値に加えて、より広い視点から山熊田の営みの価値を捉え直し、内外に向けて発信していくことが効果的と考えられる。